

書評

宮紀子

『モンゴル時代の「知」の東西』

(名古屋大学出版会、二〇一八年)

諫早 庸一

モンゴル帝国史研究は、様々な角度から進歩を続けてきた。多地域・多言語にまたがる領域を版図としたこの帝国の全体像を描こうとすれば、必然的に複数言語を読み込み複眼的な視野でもって対象にあたる必要が出てくる。日本の学界においては、例えば本田實信（一九二三—一九九九年）の一連の研究は、この分野のペルシア語史料の重要性を知らしめるのに十分なものであったが、漢語史料も随所に引用される。^①モンゴル語史料を知悉した岡田英弘（一九三一—二〇一七年）も、その研究はモンゴル語と漢語および個々の史料世界に対する確かな理解があつてこそ成り立つものであった。^②モンゴル帝国史研究そのものを認知させるのに大きく貢献した杉山正明の研究は、この分野

の史料言語の二柱が漢語とペルシア語であることを強く認識させてくれる。^③二〇一八年、日本のモンゴル帝国史学界は、こうした多言語史料研究を大きく前進させる可能性を持つ作品を得た。それが宮紀子による『モンゴル時代の「知」の東西』である。宮は博士論文を基に完成させた『モンゴル時代の出版文化』^④でこの分野での名声を確かなものとした。^⑤元々は中国文学の出身ながら、そこで培われた漢語史料の鋭い読解を縦系に、一三・一四世紀の東ユーラシアの歴史世界への確かな理解を横系に重ねてその後も重要な研究を次々と編んできた。モンゴル時代の「知」の東西交流をテーマに上梓された本書は上下二巻から成り、大きく分ければ上巻は主に漢語史料を中心に分析した既出論文から構成されている。一方で下巻においてはこれまで彼女の主戦場であった漢語史料群の枠を大きく飛び越え、ペルシア語史料をも駆使して書かれた編著の章や書き下ろしの論文で構成されており、まさに『モンゴル時代の出版文化』以後の彼女の一〇年以上の研鑽努力の結晶ともいえる部分となっている。宮のこれまでのモンゴル帝国史研究に対する貢献の大きさを思えば、同分野の研究者はこの業績に向き合わないわけにはいかない。主にアラビア文字史料からこの時代の天文学交流を研究している身としては、この書で展開される幅広いトピックの全てに対応するだけの力は到

底ないが、モンゴル帝国国史研究の未来となる本書の理解に對して些かでも貢獻できればと、無理を承知の上で書評の筆を取った次第である。まずは上下巻二〇章にも及ぶ本書の各章について、そこで扱われている史料およびトピックを中心に——時としてその意義を明言しつつ——その内容を概観していきたい。

まずは「口絵解説——序にかえて——」。上巻の冒頭には四〇に及ぶ口絵が並べられ、この作品に彩りを添えている。そしてその後の導入部が「口絵解説」と題された七〇頁以上にわたる文章である。副題に「序にかえて」とあるように、実質これが本書の序章となっている。これらの口絵のいずれもがモンゴル帝国期（一二〇六—一三六八年）の東西文化交流の貴重な証人となっており、その解説が、これから展開される総数二〇を数える諸章の「さわり」ともなっている。例えば、口絵二三「世祖クビライ・カアンをとりまく都堂の高官たち」の解説ではペルシア語史書『集史 (Jāmi' al-Tawārīkh) 』「クビライ・カアン紀」に述べられる大元ウルス高官の位階が漢語史料のそれとよく合致することが伝えられている。この種の官制や公文書に見られるモンゴル帝国東西を貫く共通性の指摘・詳述は、本書の根幹の一つであり、この書を極めて重要なものに行っている要素の一つでもある。この序章の最後には本書に一貫する

徹底した原典主義が宣言され、漢文史料については原文が、ペルシア語やイタリア語に関しては翻訳が提示されること が語られる。モンゴル帝国の東西文化交流を解析するにあ たって漢語と双璧を為すペルシア語、この読解にも宮は挑 戦するのである。高い漢文読解力はこれまでの彼女の研究 の礎である。一方でペルシア語読解の精粗は、本書の質を 左右することになると思われる。

第一部「日出づる処の資料より」では日本に残る大元ウルス期の史料の重要性が示される。第一章「対馬宗家旧蔵の元刊本『事林広記』について」および第二章「叡山文庫所蔵の『事林広記』写本について」ではモンゴル帝国期東アジアの「知」を絵入りで体现する百科事典『事林広記』が考察の中心となる。それぞれの章で扱われる対馬宗家の元刊本および叡山文庫に伝わる写本は、いずれも宮が見出した初期のテキストであり、特にそれらの官制・法制の部分には既知のテキストからはまったく得られなかった情報が大量に含まれている。第二章に付された二篇の附論「陳元靚『博聞録』攷」および「新たな『事林広記』版本の発見にむけて」も『事林広記』に関わるものであり、前者が『事林広記』の前身である『博聞録』について、後者が『事林広記』のさらなるテキストの発見可能性について、とくに「抄物」の重要性の指摘と併せて語る。第三章「江戸時

代に出土した博多聖福寺の銀錠について」では博多から出土した銀錠がモンゴル時代以降ユーラシア東西に広く流通した代物であったことが指摘され、第四章『卜筮元龜』とその周辺』では『周易』の注釈に比べて低俗なものとしてじゅうらい注目されてこなかった断易の類である『卜筮元龜』が再評価される。

第二部「大元ウルスの宗教政策」は三章から成る。第五章「歴代カアンと正一教——『龍虎山志』の命令文より——」では道教教団、正一教が一三—一三年に時のカアン、アユルバルワダ（治世一三一—一三二〇年）の聖旨の下、元明善によつて編まれた『龍虎山志』に集録される大元ウルス発令の大量の命令文・碑記を通じて分析に付され、大元ウルスによる南北統一（一二七五年）から延祐初年（一三二四年）までの正一教の歴史が丁寧に跡付けられる。第六章「庇護される孔子の末裔たち——徽州文書にのこる衍聖公の命令書——」では道教を扱った第五章に続いて儒教が主題となる。孔子の末裔たる曲阜孔家のトップで、全国の儒学を統べる立場にあった衍聖公が発給した文書は、モンゴル帝国期においてはほとんど手つかずの状況にある。こうした現状を踏まえ、徽州出身の明代の大物官僚であった程敏政が編纂した『新安文獻志』に収録される元朝末期の衍聖公の命令文の、とくに大元ウルス最末期の至正年間（一三四—

一三七〇年）に衍聖公が発給した「元給孔氏子孫遊学文憑」が紹介される。第七章「地方神の加封と祭祀——『新安忠烈廟神紀実』より——」では徽州に関わる文書群が扱われる。書物の中に残された徽州の文書的重要性を主張する宮が対象とするのは、徽州にある忠烈廟とそこに祀られる汪華（五八六—六四九年）の後裔である。『新安忠烈廟神紀実』なる書物に見える大元ウルス期の文書数通の分析を通じて「もうひとつの徽州文書研究の可能性」が提示される。

第三部「ケシクからみた大元ウルス史」は第八章「バウルチたちの勸農政策——『農桑輯要』の出版をめぐつて——」から始まる。この章の主題はユーラシア東西の帝国領で重視された勸農政策であり、特に大元ウルスにおけるその統括機関たる大司農司——名称には変動あり——とその編纂物として我々に伝わる『農桑輯要』である。第九章「ブラルグチ再考——カネとちからの闘争史——」で扱われるのはその職掌が主として、鷹鷲や馬足、刀剣などの遺失物全般の保管にあった「ブラルグチ」である。この語を見直すことは、モンゴル時代の馬制・軍政全体の把握、『元史』の志の見直し、ケシク制やジャムチ制の解明、さらにはユーラシア規模の馬貿易および奴隸交易の分析の手掛かりとなる。上巻最後の第一〇章「モンゴル・バクシとビチクチた

ち」の分析対象はハンの侍従集団ともいふべき「ケシク／怯薛」のなかでも特に文書起草に関連する「ピチクチ／必闡赤」と「バクシ／師傅・師父」であり、彼らの職掌がペルシア語の文書マニュアル『書記典範 (Dastur al-Katib)』に収録される任命書から分析される。

下巻は第四部「ユーラシア東西の文化交流」から始まる。その冒頭、第一章「移刺楚才『西遊録』とその周辺」で考察の中心となるのは移刺楚才（一二九〇—一二四四年）——宮は人口に膾炙した「耶律楚材」の名を通称としている——とくに彼が編集・刊行した『西遊録』である。その題名が想像させるところとは異なり、その内容の多くは当時華北で活躍していた新興の道教教団、全真教に対する批判であった。その所以は彼の華北経営への野望に帰せられる。第二章「フレグ大王と中国学——常德の旅行記より——」では、前章と同じく漢語で「西行」を記したテキストが主眼に置かれる。それが一二六三年に劉郁の手によって記された「西使記」であり、その使いとは常德なる官僚であった。医学に精通していた常德は第四代カアン、モンケ（治世一二五一—一二五九年）による東西ユーラシアの「知」の包括——暦や度量衡の統一、世界地図の編纂、東西の薬の総覧——のための政策を背景に、医薬の情報を集めるべく西域はフレグ・ウルス（一二五六頃—一二五七年）

へと派遣されたのであった。この章の附論「マラーガ司天台と『イル・カン天文表』について」で扱われるのは天文学である。第三章「モンゴル王族と漢児（キタイ）の技術主義集団」は天文学と並ぶモンゴル帝国期ユーラシアにおける「知」の二柱、医学についてのものとなる。真定路の軍閥、史天沢の下で活躍した医師、羅天益はそのカルテの一部を『衛生宝鑑』なる症例・処方箋集に利用した。彼は真定の出身で後にクビライのブレインとなった多くの重臣たちを診ていたのである。第十四章『元典章』が語るフレグ・ウルスの重大事変」では天文学・医学に続いて政書が扱われる。具体的には『元典章』に収録される至元一六年（一二二四年）二月二十四日（一二八〇年一月二十七日）の案件【回の欲しいままに屠宰／屠殺を行うを禁ずる】がこの章のメイン史料であり、ここに語られる事件の数々がペルシア語『集史』『ワッサーフ史 (Tarikh-i Wassaḥ)』、漢語『元史』などとの比較のもとに精査される。第五章「ユーラシア東西における度量衡統一の試み」では前の章と同じくユーラシアの東西が扱われるが、そのテーマは度量衡、とくにその統一の試みである。この種の政策はフレグ・ウルスにおいてはガザン（治世一二九五—一三〇四年）の改革の一例とされるが、それは実のところ大元ウルスで実施されていた政策の踏襲であった。第十六章「ジャライル朝の

金宝令旨より」で分析されるのは広義の「アルダビール文書」の一つである。イラン、アルダビールのシャイフ・サフィー・アッディーン・イスハーク（一二五二—一三三四年）の墓廟に関わる文書群は、教団史・イラン史・世界史の重要史料として研究者の注目を集め続けているが、そのなかで最も早く研究の対象となったバリの国立図書館所蔵の *supplément persan 1630* がテキストのみならず、そこに付される印章も含めて分析され、当時ユーラシアの東西で共有されてきた重要概念・用語の一端が明らかにされる。

最終第五部「ラシードウッディーンの翻訳事業」は第一章「ラシードウッディーンが語る南宋接收」から始まる。この部の各章においてラシード・アッディーン（一二四九／五〇—一三三八）が漢語からペルシア語への翻訳事業で生み出した作品が扱われるわけだが、この章では『集史』の第二部「世界史」に収録された「中国史」が分析に付され、その原典が道仏論争にも立会いその後ラシード・アッディーンのインフォーマントとなったボロト丞相がモンゴル語訳で愛読した『通鑑節要』／『通鑑要略』もしくは『仏祖歷代通載』とその内容を共通させる『緝事記』ではないかと推察されている。第十八章「ラシードウッディーンの農書に見える中国情報」では、『集史』「中国史」に引き続き、農書『踪跡と生物 (*āḥār wa āyāt*)』がメイ

ンに扱われる。これは大元ウルス治下においてボロト丞相率いる大司農司が編纂した『農桑撮要』の構成と非常によく似ている。当代の「知」の東西交流の具体相を看取すべく、東西交流を考えるうえで特に重要と思しき農産物・貿易商品に関する記述に対してその訳注が提示される。第十九章「*Tankūq nāmāh* の『脈訣』原本を尋ねて——モンゴル時代の書物の旅——」からは『珍貴の書 (*Tankūq nāmāh*)』が主題となる。これは、ラシード・アッディーンが『王叔和脈訣』『銅人』『本草』『泰和律令』といった医薬書・政書を選んでペルシア語に訳した集成であった。その第一書『王叔和脈訣』に関して羽田亨一は、その原書を、巻数・冊数・刊行年といった諸条件から、一二六六年刊行の李嗣『晞范脈訣』一二巻に比定した。この章で宮は主に日本に残る李嗣の著述の挿絵と佚文の分析から、『晞范脈訣』と『珍貴の書』との巻数・内容・挿絵の一致を見、羽田亨一の比定の正しさを実証している。最終第二〇章「*Tankūq nāmāh* の『序文』抄訳」では前章で紹介された『珍貴の書』の序文の抄訳が提示される。『集史』中国史の序文が、彼自身の「中国文化」に対する知識を披瀝する貴重な史料であることはつとに知られていたが、一方で同じくラシード・アッディーンが撰した『珍貴の書』の序文の方がはるかに長大で、かつ『集史』中国史を補完する内容である。それ

にもかかわらず、利用がほとんどされないままに留まっていることを宮は指摘する。こうした前提のもと『珍貴の書』の序文が「フレグ・ウルスの翻訳事業」「翻訳作業の人材育成」「漢字の歴史と効能、初学用教材について」「印刷品——書物と交鈔」「太楽署の工尺譜」「叢書の構成と注意事項」という項目に分けて注釈と併せて提示される。

以上が本書二〇章の簡略と主要史料の紹介となる。宮の研究の最大の長所の一つは、複雑怪奇な大元ウルスのシステムおよびその変遷を人物・地理の双方より知悉したうえで、図書館や寺社の史料をくまなく調べ、当地の人間にも価値が見いだされなかった貴重書群を（再）発見・研究してきたことにある。この本の諸章においてもその長所が存分に活かされている。第一・二章で見出された『事林広記』の対馬宗家に伝来した元刊本と延暦寺恵心院の旧蔵に係る写本はまさにその典型であるし、自らの専門との関係で言えば、第二・三章で発見が報告される『儒門事親』元刊本（北京大学図書館所蔵）の冒頭に掲げられた一二六二年付けの高鳴の序文は大変に価値のあるものであった。ここでの記述を基に宮は、『集史』『中国史』においてナスィール・アッディーン・トゥウスィー（一二〇一—一二七四年）と天文對話を為した「漢児の賢人」がフレグの侍医傳野であったことを——その字（あざな）の分析から——明らかにした。

私事ながらこの成果がなければ評者は博士論文を完成させることはままならなかったであろう。原著論文は何度読み返したか分からない。この強みをもってすれば、依然として明らかになっていない『集史』『中国史』の原書や『珍貴の書』の原典の数々もまた発見が遠からぬことなのではないかと期待してしまふ。

それぞれの章のメイン史料だけを見ても、この書が漢語・ペルシア語の双壁に真つ向から取り組んだ労作である事が理解されるであろう。しかも、それらの史料は漢語についてはその深さにおいて、ペルシア語においてはその広さにおいて、これまで双方の史料を駆使して生み出されてきた研究とは一線を画するものである。例えば、モンゴル帝国史の東西文化交渉史研究の分野で随一と評価の高いトーマス・オルセンの作品ですら、これだけの広さ・深さは持ち合わせていないように感じられる。この長所によりモンゴル帝国の特に大元ウルスとフレグ・ウルスとの交流が史料という確かな土台を基に描かれる。例えば第一・四章においては、クビライ一代を通じフレグ・ウルスは大元ウルスを宗主とする姿勢を崩してはいないこと、両王朝は手中にした版図と富を守るため、強固な協力関係を築いていたことが明らかにされる。さらに第七章・八章においては、従来評価の高くなかったイスン・テムル期の再評価も訴えられ

宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西』（諫早）

ている。泰定年間（一二三四—一二二八年）はフレグ・ウルスのアブー・サイド（治世一三一六—一三三五年）との活発な交流が見られるなど、大元ウルスが再び活況を取り戻した時期でもあったのである。

さらに人物の視点から見れば、この書を通じて最も重要な人物の一人がドルベン部のボロト（一三一三年没）である。彼は第八章で扱われた大司農司に一二七〇年に着任し、後にフレグ・ウルスへと赴いて、イランでラシード・アッディーンとともに東西の「知」の交流の担い手となった。第五部の主題であるラシード・アッディーンの翻訳事業において生み出された作品のほとんどは、このボロトからもたらされた情報あるいは書籍を基にしている。彼は一二八三年に大元ウルスからフレグ・ウルスへと派遣される。その後すぐにフレグ・ウルスにおいても重用され、ガイハトウ時代（一二九一—一二九五年）の交鈔の発行は彼の助言だとされている。ボロトは一二八三年までクビライ・チンキム父子に仕え、中書省・樞密院の中心で様々な制度設計・政策決定に関与してきた人物であった。そんな彼がフレグ・ウルスへと出立する直前にまさに取り組んでいたのが、第五章で扱われた度量衡統一の案件だったことも明らかにされる。

さらに、漢語・ペルシア語の二大史料の渉獵はひとえに

大元ウルスとフレグ・ウルス相互の交流を明らかにするに留まらない。ある意味ではそれ以上に重要なこととして、例えばペルシア語史料は大元ウルスの国撰史料が隠蔽しようとしたことを時にはつきりと伝えてくれる。政治・社会的文脈についての適正な理解の下で双方の史料を読み込むことで、こうした「史料の裏」が別言語から明らかにされる。その最たる例が——宮の言葉を借りれば——「大元ウルス最大のタブー」であった四年間（一二八〇—一二八三年）にわたるチンキムのカアン位への即位とその時に生じたクビライとチンキムの不和である。第四章でメインに扱われる『元典章』【回回の欲しいままに屠宰／屠殺を行うを禁ずる】はまさに一二八〇年一月二十七日というチンキムの施政が始まったばかりの時期に発給されたものであった。両者の対立はチンキムの死でもって幕を閉じる。この時期の記述は——大元ウルス国撰のものであればあるほど——その後の改竄が疑われる記述に満ちており、真実・実態の見極めが特に難しい時期なのであった。この案件の背景にもチンキムを戴くウイグル・モンゴル高官とムスリム官僚との利権争いがあったと宮は主張する。結果、チンキムが実質王朝の統治者となっていた一二八〇年から一二八三年までは割札が許されず、一二八六年まで羊の喉を搔つ切るイスラム教の屠殺法が禁じられていた。この年はチンキ

ム派の掃討が完了した時期に重なる。さらにこれはフレグ・ウルスにおいてアフマド・テグデル（在位一二八二—一二八四年）が即位し、同王朝で初のムスリム君主となった時期でもあった。同じムスリム君主としてシリア・エジプトの 맘ルーク朝（一二五〇—一五一七年）と連携を図ったアフマドに対してクビライが激怒したことがアルメニア史料に見えることまでも宮は伝え、この時代のユーラシア東西の政治状況が見渡されるのである。

フレグ・ウルスで書かれたものをはじめとするアラビア文字史料を専門とする身からすれば、この書は漢語史料でもってフレグ・ウルス史に革命をもたらすものであったと表現できる。おそらくは、かつてルベン・アミタイがマムルーク朝期のアラビア語史料でもってフレグ・ウルス史に革命をもたらしたのも、これと同じようなインパクトだったのだろう^⑩。ただし、これだけのヴォリユームで展開された本書、その疑問点もまた——その多大なる長所と同じく——指摘することができるかもしれない。そのほとんどはベルシア語史料に対してのものではあるが、天文学史を専門とする関係上、その文脈に関して漢語史料についても少々述べたい。それは第一部「日出づる処の資料より」で主に扱われた『事林広記』についてである。『事林広記』の第二巻「暦候類」を見れば、この箇所の記述は例えば当

時の大元ウルスの官僚らが改暦に用いていた「先端科学」などとは到底呼べない「民間科学 (folk astronomy)」の水準に留まっている^⑪。こうした点だけを見れば、これが著者の言うような最新の情報をふんだんに盛り込んだ権力へのパスポートというよりは、「民間」の日用類書^⑫という従来の理解が近いのではないかと思えてしまう。そもそも、特定の書物が広く流布したことは、その書が最新の知見を盛り込んだものであったことを必要条件とはしない。例えば、この書の第二章附編において言及されている回回司天台の蔵書目録に見える『麻塔合立 (Makthal)』に関して、これは矢野道雄が詳細に検討した、明代初期に漢訳されたクーシヤール・ブン・ラッバーン（九六六年頃活躍）の『占星術入門の書 (Kitāb al-Makthāl fī Šinā'at al-ḥikām al-Nujūm)』であったことはほぼ間違いない。矢野が述べるように、この書自体にオリジナリティーは見出しがたく、むしろ当時の占星術を要領よくまとめたものとなっている。しかし、写本の残存状況から見て、アブー・マアシャル（七八七—八八六年）やビールーニー（九七六—一〇五二年）のもののような分野の代表作以上にイスラム圏の東方においては流布したことが知られる^⑬。この事実はこの書こそが漢訳文献に選ばれたことから補強される。最新かつ高度な内容よりも簡便さが時として普及の決め手となる良い例

である。このことは、第一章で問われる、なぜ『珍貴の書』第一書『王叔和脈訣』の原典が当時進歩的であった華北の医書ではなく、江南のものであったのかということについても、考慮されるべき前提なのかもしれない。

天文学史が評者の専門であることから、疑問点の提示はそれに関するものが中心となる。本書において天文学にフォーカスしたのは第二章附編「マラーガ司天台と『イル・カン天文表』について」である。まずこの章の最初の行からであるが、『ワッサーフ史』がフレグ・ウルスの第八代オルジェイトウ（治世一三〇四—一三二六年）に献呈されたとなっている。しかし、少なくともその後引用される第一巻の部分は一三〇三年三月、先代のガザンに献呈されている。この引用箇所¹⁴の読解については最初の部分に現れる「*amā* 同管区」¹⁵は、参照されているボンベイの石版本およびイスタンブル写本——パリ写本は未見——では *v. nā* となっている¹⁶。次に、論旨に関わることとして術語の選定について述べたい。この引用箇所ではイスラム圏の天文便覧である「ズイージュ（*zīj*）」に「暦」という訳が充てられている。ただ、この文化圏における天文学の総覧ともいえるズイージュにおいて暦に関わる部分は一部である。もちろん「暦」の語は、先に言及した回司天台の蔵書目録のなかに見られるズイージュの漢訳「諸家暦」か

らのものであろう——事実後段ではそのように訳されている¹⁸。ともすれば、この事実は一〇〇〇頁を超える本書のなかのわずか一頁の訳の疑問以上のことを提示するものなのかもしれない。なぜならば、このことは著者のペルシア語読解を支えるメソッド——つまり同時代の漢文脈に対する無尽蔵の知識を応用して対応語をペルシア語に当てはめること——の有効性を計ることのできる箇所であるかもしれないと思うからだ。このメソッドがとくにモンゴル時代のペルシア語政書に対して有する高い有効性は、これが縦横に駆使される第四章が下巻の白眉となっていることに如実に現れている。失礼に響くかもしれないが、箇所によっては初歩的なテキストに躓きつつ¹⁹、それよりもはるかに難解な『書記典範』や「アルダビール文書」といった政書や公文書を読解できること自体が、このメソッドの有意性を十分に示してくれている。一方でそれは——著者がそれを適用する範囲の広さほどには——万能ではないのかもしれない。とくにその背後にモンゴル語による発話／叙述を前提としないテキストにおいてこのメソッドを適用することは妥当なのだろうか。

再び天文学の例で恐縮であるが、第二〇章の『珍貴の書』序文の抄訳のなかにあるトゥースイーと傳野との対話についての段で、“*Hay'a*”と“*Mujisat*”という単語が出てく

る。これに関しては「窮曆法段数」「造司天儀式」という訳が当てられている。⁽²¹⁾これはもちろん先述の回回司天台の蔵書目録に現れる漢訳をペルシア語に対応させたものであるが、日本語として理解するのは難しい。「ハイア (hay'a)」とはその名の通り「世界の構造 (hay'at al-'alam)」を詳らかにするための学問であり、そのなかで天体は幾何学モデルで表現される。その基となったテクストが次に登場する『アルマゲスト (Majisī)』である。⁽²²⁾“Majisī”の語が『アルマゲスト』を意味することはすでに本書で示されており、それをここに当てはめることには何の問題もなかった。そのような状況のなかでもメソッドの適用にこだわってしまったことで、翻訳が追求すべき「分かりやすさ」が損なわれてしまったことは遺憾と表現できるかもしれない。ここでこれら二語が現れることの重要性は、ここでは西ユーラシア伝統の幾何天文学でもって東ユーラシアの計量天文学が理解されているというところにある。ここは東西文化交渉の具体相に触れられる実に貴重な箇所だといえる。⁽²³⁾『アルマゲスト』について少々言葉を継ぎたい。そもそもの書の対応漢語「造司天儀式」は、その内容が天文機器についてのものであることを伝えている。しかしネイサン・スィヴィンがすでにこの問題についての議論のなかで述べているように、『アルマゲスト』のなかで機器に関わる記述は

全体の一パーセント程度であり、この漢訳は——あくまで現代語訳としては——対応語にすらなっていない。⁽²⁵⁾

この事実はこのメソッドを天文学テクストに適用することに対する限界を示すのみならず、当代ユーラシアの「知」の交流を示すうえでも重要だと考える。漢語とペルシア語とは、モンゴル帝国期の史料の双壁であるとは繰り返し述べてきた。そしてこの両言語がシンクロする文脈は——まさに本書がこのメソッドを様々な文脈で適応してくれたからこそ明らかになったことだが——政書のような為政者の意向を反映した「上から」のテクストである。もちろん、漢語とペルシア語をはじめとするモンゴル時代の史料のほとんどは「被征服者」によるものだとする認識は現在に至るまで学界において一般的であり、たとえ直接的には「被征服者」によって書かれたものであったとしても、そこから「征服者」のことは見通すことのできるメソッドとその有効性を提示したことの重要性はどれだけ強調しても強調しすぎることはない。しかしモンゴル時代の「知」の交流は——著者も十二分に理解されていることであろうが——決して「上から」のみ行われたわけではないし、「上から」の場合でもスムーズに展開したわけではない。⁽²⁷⁾例えばトウースイーと傳野との「天文對話」の主要な部分はおそらく中国において官制天文学の埒外にあったホロスコープ

占星術であった²⁸⁾。天文学とともに「知」の二柱であった医学に関しても、本書で主に扱われるラシード・アッディーンの翻訳事業とその成果物である『珍貴の書』について、著者はこの書を完成したものと見なしているように読めるものの、²⁹⁾そもそも『珍貴の書』は序文と第一書のみを含む一写本しか得られていない現状があり、この書について専論をものしたベルシス・ベルカンブはこれが未完のプロジェクトであったと見なしている。美術史家である彼女は、当時のユーラシア東西における医学伝統の隔たりは、「普遍語」として機能しえた図像の力をもつてしても埋めることはできなかったと結論づける³⁰⁾。さらに翻訳事業そのものに関しても、博士論文でラシード・アッディーンを扱ったステファン・カモラは、ラシード・アッディーンの著作全集編集プロジェクトについて、中国医学を含めた「知」の統合が目指されたものの、それは果たされず結局のところすでに完成していた諸作品の集成に留まったことを論じている³¹⁾。当時宮廷が最も欲した「知」であった天文学と医学でさえ東西の溝は深く、モンゴルが容易に統合を図れる状況にはなかった。本書のペルシア語読解メソッドが有効に適用されえた範囲は、そのことを示す証拠ともなると書けば飛躍との誹りを免れないであろうか。

このように挑戦と限界とがせめぎ合うモンゴル時代の

「知」の東西を明らかにするためには、王道など存在しないのであろう。個々の「知」について個々の伝統の下での理解を積み重ねていかなければならないのであろう。その包括は個人には不可能であるかもしれない。しかし、我々はこれまでなされてきた研究の積み重ねの上にのることで広い視野をえることができる。本書に関して評者が率直に言って残念に思うのは、著者の比類ない能力がこの方向には必ずしも向いていないように感じられるところである。再び第一二章附編に戻りたい。

先に述べた翻訳の箇所後に議論されるジャマル・アッディーン（一二八九年頃没）がクビライに献呈した天文機器「西域儀象」について、それらがフレグ期に建てられたマラーガ天文台やガザン期に建てられたタブリーズ天文台に据えられた天文機器と重なり合うことが記されている。まずはタブリーズ天文台に設置されたと著者が考える機器は、まさに著者がこの箇所で引用している論文のなかではマラーガ天文台に据えられたものであるとされていることを指摘しておきたい³²⁾。ここでの議論においてこれ以外に二次文献は引用されず、一次史料が示されるだけであるが、両王朝の天文機器が重なりあうことは著者が天文学の知見を駆使して独自に原典読解によって判断したのであるうか。もしそうでないのであれば、依拠した論文を挙げる

必要があったであろう。³⁴⁾この問題に関しては続く箇所において、ジャマル・アッディーンがマラーガ天文台でトゥーシイの薫陶を受けたことが語られている。ウィリー・ハルトナーが唱えたこの説はすでに一九八〇年代には山田慶兒によって否定されている。クビライが潜邸期にあった一二五〇年代——つまりマラーガ天文台の建設前——にはすでにジャマル・アッディーンは東方に来ていた。³⁵⁾この説を否定しきらなければ、それに続く一二六七年にジャマル・アッディーンがクビライに献呈したとされる『万年暦』が、トゥーシイがマラーガ天文台で編んだ『イル・ハン天文便覧 (Niz-i Ilkhan) 』(一二七二年頃)の稿本であったとする議論に頷くことは難しい。分野の専門家としてこは声を大にして主張したいが、本書では自明視されているようにも読める大都とマラーガの天文台相互の交流は、現存史料からは証明できない。³⁶⁾

これに続くのが先ほどから言及している『秘書監志』に記される回司天台の文献目録である。これについては「ほとんどがペルシア語の訳注本であり、ナスィールウッディーンの著作目録に見える分野の書籍書名が目につく。マラーガで使用されていた教材と同じものがそのまま大元ウルスにも導入されていたと見ていい」とある。³⁸⁾ただ、先に述べたように『麻塔合立 (Maddhat) 』はクーシヤール

の作品であってトゥーシイのものではないし、それがペルシア語だったとも言い切れない。目録にある『兀忽列的 (Yuktis) 』はエウクレイデス『原論』、『麦者思的 (Majis) 』は『アルマゲスト』であったことはすでに知られているが、トゥーシイの『原論』と『アルマゲスト』に対する「注釈本 (taḥṣīn) 」で圧倒的な影響力を有したのはアラビア語のものである。著者は自らが語る「ナスィールウッディーンの著作目録」が具体的になんであるのかを示すべきだったのかもしれない。こうしたことから、この段の結論であるマラーガの教材が大元ウルスに導入されたことを肯定することは難しい。

その後『イル・ハン天文便覧』に記された中国暦について、「金朝以来、司天台での採用・資格試験に用いられていた教科書——『重修大明暦』、『宣明暦』、『符天暦』の知識に基づくことが予想される」と書かれている。しかしながら、この中国暦の典拠に関しては、著者が別箇所 で引用している(下巻、六二九頁、注三四) ベンノ・ファン・ダーレンらの論文において、それが『重修大明暦』と『符天暦』を典拠とするものであることがすでに語られているので、実際には著者の予想ではないのであろう。³⁹⁾この附編のなかでは最後に触れたのが、『万年暦』と『イル・ハン天文便覧』との関係についての議論である。著者は、一三一

年に『イル・ハン天文便覧』の修訂・補注本が「新たに長い序文を附して」⁴⁴ 献呈されたこと、それが一三二三年にカリム・アッディーンが仁宗アユルバルワダに献じた『万年暦』であったことをなかなば事実のように語る。この『イル・ハン天文便覧』の修正本とは、かつてアンドリュール・ボイルがその「長い序文」を紹介したロンドン写本 (British Library, Or. 7464) であるとされている。⁴⁵ 奥付に書写年がヒジュラ暦六七六年（西暦一二七七／七八年）と明記されているこの写本から一三二一年という年代が捻り出された所以は、序文が記す積年の計算違いにある。この計算に従えばチンギスの即位（一二〇三年）が一三二一年のこととなってしまうのである。⁴⁶ しかし、「あるいはこの序文の作成年を誤って入れたものか」という注での留保を、それ以上の補強なく本文で事実として断定するのにはさすがに無理がある。写本そのものを見ると逆に、序文と本文とで筆記の違いは見られず、奥付の書写年代を序文のそれと見ることに無理は無いように感じられてしまう。このように見ると、一三二三年に献呈された『万年暦』に関わる議論は宙に浮く。

このように断定調ながら意外にも再検討を要する議論は、天文学関係の議論には限られないのかもしれない。一例として第一三章の議論を挙げたい。ここでは各ウルスが

それぞれ有していた他のウルス内の分地（投下領）がヒト・モノ・情報のウルス間交流を促進し、モンゴル帝国の東西交流に大きく貢献したというきわめて重要な指摘がなされる。その「飛び地」が大元ウルス領内のみならず西方の諸ウルスにも設定されていたことの証左として引かれるのが、後代ティムール朝期（一三七〇—一五〇七年）の史料『ムイーン史選 (Muntakhab al-Tawārikh-i Mu'īn)』である。⁴⁸ 管見の限り、著者がこの書全体を通じてティムール朝史料に言及する場面は限定されており、この引用はいささか唐突なものに映る。しかもこの『ムイーン史選』は両『勝利の書 (Zafar-nāma)』やハーフィズ・アブル（一四三〇年没）の著作に比べればティムール朝の公式史観を反映したものでは必ずしもなく、王朝年代記のなかではどちらかといえば傍流に属する。⁴⁹ 著者が論拠としたものと同じ箇所が、帝国の投下領についてのオルセンの論文にも引用されているのは偶然であろうか。⁵⁰ しかも『ムイーン史選』——「イスカンダル無名氏」——のこの部分の記述は、チャガタイ・ウルスの後継を自認するティムールが、ホラズム侵攻に際してこの地が元来ジョチ・ウルス内にあったチャガタイ・ウルスの「飛び地」であったことを記すことで、その接收を正当化しようという、極めてティムール期の文脈にある記述である。⁵¹ これをもつて西域の諸ウルスを含む投

下領が——チングスの「意思」の下——東西交流を促進させたことには苦しさを感じる。もちろん引用の問題とは別に、投下領と東西文化交流との関係性についての指摘には高い蓋然性がある。しかしそれは、投下領についての諸先学の研究蓄積あつてのものであろう。⁵²⁾同じ章について、華北の数学の飛躍を「イスラーム科学」の流入に求める議論にも触れておきたい。⁵³⁾この主張の基盤は当時の人とテクストの流動を把握し、その交流を推測する精緻な外的分析である。ただ、この議論を断定レヴェルにまで高めるにはこうした外的分析に加えて、漢語・ペルシア語の数学書の内容を比較するような内的分析も必要になるはずである。

本書の全てを通じて、引用される二次文献は驚くほどに少ない。しかし、『集史』『中国史』をめぐる第一章においては、『集史』編纂事業について新見解を伝える大塚修の研究への言及がしつかりとなされている。⁵⁴⁾大塚論文に關して著者は、それがカーシャーニー『歴史精髓 (Zubdat al-Tawārikh)』を精査したものであること、結果「それが『集史』第二部に収録される世界史と内容をほぼ同じくするのみならず、より詳細な序文をもち、より広範な地域を扱うことを確認した」⁵⁵⁾ものであるとし「もつとも、カーシャーニーの発言は、オルジェイトウの死、ラシードウツデー

ンの凋落を眺めつつなされており、留意が必要だろう」⁵⁶⁾と続ける。そしてその後、に、『集史』がすでにガザンの時代から「世界史」を含んだ形で構想されていたことを論じる。ただ管見の限り、大塚論文のポイントは必ずしもそこにはない。『歴史精髓』および『集史』の写本群を渉獵したうえで、従来考えられてきたところとは逆に、ラシード・アッディーンの方がその「世界史」編纂にあたってカーシャーニーの『歴史精髓』に依拠していたのだというのが彼の主張の核心である。著者と大塚との主張の違いは、ガザン期にすでにラシード・アッディーン編纂の史書において「世界史」を編入する構想があつたか否かという問題である。この議論の是非を論じることは評者の手に余る。しかし、これについての議論は、大塚が論じている『集史』『世界史』のなかにある「書き換え」を遡上に載せずにしては可能なものとはならないであろう。それをせずに自らの議論に寄る記述のみを引用することは議論としては生産的ではない。少なくともラシード・アッディーンがカーシャーニーに拠つたこと、しかもその事実をある意味では「隠す」ような行動に出ていることは明らかであり、この事実はカーシャーニーの発言の文脈を超えた問題なのではないだろうか。著者の能力をもつてすれば、自らの議論に沿う史料をこれでもかと引用することが可能であろう。しかし、この

宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西』（諫早）

箇所のように、それだけでは説得力を持たない局面もある。

圧倒的な筆力で我々に迫るこの二巻本を読めば、モンゴル時代の「知」の東西が明らかになるのであろうか。おそらく明らかにするのだろう。しかし、それは著者が描きかけた絵とは少々違ったものであるかもしれない。歴史学の実践に際して我々は「巨人の肩の上にいる矮人（*nani gigantum humeris insidentes*）」であることを認識せずにはいられない。「巨人」とは過去である。過去に記されたもの、敬意を払う対象に一次史料・二次文献の区別はない。自分への戒めとしたい。

付記

ここで書評の対象とした書籍は、名古屋大学出版会より、学術利用を目的としてご惠授いただいたものである。出版会および仲介の労を取っていただいた小澤実氏（立教大学）にこの場を借りて深く感謝させていただきたい。執筆に際しては、四日市康博氏（立教大学）に多くの助言をいただいた。このことも付して感謝の表明とさせていただきます。本研究は日本学術振興会科研費（18J40179）の助成を受けたものである。

註

- (1) 本田實信『モンゴル時代史研究』（東京大学出版会、一九九一年）。
- (2) 岡田英弘『モンゴル帝国から大清帝国へ』（藤原書店、二〇一〇年）。
- (3) 杉山正明『モンゴル帝国と大元ウルス』（京都大学学術出版会、二〇〇四年）。
- (4) 宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西』上下巻（名古屋大学出版会、二〇一八年）。
- (5) 宮紀子『モンゴル時代の出版文化』（名古屋大学出版会、二〇〇六年）。
- (6) この書においては基本的には帝国の四王朝は、モンゴル語で「く」を意味するウルスの語が付されて表現される。一二六〇年代の分裂以降も、帝国は四王家のウルスを中心に緩やかな連帯を維持していたとされる。クビライを始祖とする「大元ウルス」（通称「元朝」）を宗主国として、中央アジアの「チャガタイ・ウルス」（通称「チャガタイ・ハン国」）、ロシア平原にまたがる「ジョチ・ウルス」（通称「キプチャク・ハン国」）、そしてイラン・イラクを版図とした「フレグ・ウルス」（通称「イル・ハン国」）の四ウルスである（杉山正明『モンゴル帝国の興亡』上下巻、講談社、一九九六年）。こうした理解の下に展開される本書は、四王家の「く」に対して——通称ではなく——以上の用語を適用してゐることを前提として理解されたい。
- (7) 宮『モンゴル時代の「知」の東西』上巻、二五四頁。
- (8) Thomas Allsen, *Culture and Conquest in Mongol Eurasia*, New York, Cambridge University Press, 2001.
- (9) 宮『モンゴル時代の「知」の東西』上巻、一四四頁。
- (10) David Morgan, "The Mongols in Iran: A Reappraisal," *Iran* 42 (2004), p. 132; Reuven Amitai, *Mongols and Mamluks: The Mamluk-Ikhānīd War, 1260–1281*, Cambridge, Cambridge University Press, 1995.
- (11) 例えば、そこで引用されるのは『漢書』の律曆志であり、そこに見える置閏法は全く初歩的な水準に留まっている（陳元觀『新編纂圖増補羣書類要事林廣記』（椿社書院元刊本）巻二「曆候類」【曆法本原】【置閏之法】）。
- (12) 宮『モンゴル時代の出版文化』五三六頁。
- (13) Yano Michio, *Kūshiyār ibn Labbān's Kitāb al-Madkhal fī Sīnā'at al-Hikām al-Nuḡmā (Introduction to Astrology)*, Tokyo, Tokyo University of Foreign Studies, 1997, p. VIII.
- (14) Judith Pfeiffer, "A Turbid History of the Mongol Empire in Persia: Epistemological Reflections concerning an Edition of Vassāf's *Tajizvat al-Anṣār va Tajizvat al-Ā'sār*," in J. Pfeiffer and M. Kropp (eds.), *Theoretical Approaches to the Transmission and Edition of Oriental Manuscripts*, Würzburg, Ergon Verlag, 2007, p. 108. しかし、ジョナサン・ブラックは近年、この時点で最初の三巻までもガザンに献呈していたとの説を提示している（Jonathan Brack, *Mediating Sacred Kingship: Conversion and Sovereignty in Mongol Iran*, Ph.D. dissertation, University of Michigan, 2016, p. 338 n. 812）。
- (15) 宮『モンゴル時代の「知」の東西』下巻、六一一頁。
- (16) 個々の写本およびテキスト同士に異同があり、意味を取りにくい箇所であるが、読みやすさという面だけを考慮すれば、ヨーゼフ・フォン・ハンマー＝ブルクシュター

宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西』（諫早）

ルのテキストが参照できる（Joseph von Hammer-Purgstall, *Geschichte Massafs*, Wien, Hof- und Staatsdruckerei, 1856, p. 99）。このテキストは *chün pādshāh-i mamlakat-gīr Hilāgū Khān kār-i Baghdād wa a'māl-i Mawjū wa Dīrābahr-rā bahūm-i qāt-i tigh ba-fayṣal rasānd* … となっているので「国を執りたる帝王フレグ・ハンがバグダードの事柄とモスルおよびディヤールバクルの諸事を剣による絶対の命で以て解決に至らしめ…」とでも訳せるだろうか。そうすればこの単語を「同管区」と訳して地域の単語と同列におく必要はなくなる。あくまで読解の一提案として記させていたただく。

- (17) ズイージュの内容については例えば、三村太郎『天文学の誕生——イスラム文化の役割——』（岩波書店、二〇一〇年）四八頁にまとめられている。このでの「(一)年代記」が暦とその換算の部分である。

- (18) 宮『モンゴル時代の「知」の東西』下巻、六一二頁。

- (19) 例えば『集史』『中国史』に関して、第一〇章の冒頭に掲げられる「中国史」の序文の箇所について「如今（いま）、寄進者たちから、当該地の諸事情について詳細な調査をした結果…」（宮『モンゴル時代の「知」の東西』上巻、四八九頁）とする箇所であるが、著者は「寄進者（*Vaqfian*）」に注をつけ、「事情通たち」の意味もあるもののあえてそのように訳した旨を記している（前掲書、上巻、五〇八頁、注二）。原文は *wa darīn waqt az wāqifān bar ahwāl-i ānyā ba-sabīl-i taabbu'-i ijtāfāt ān ma'lūm shuda* となっており、*wāqifān* の基になる動詞 *waqafa* は「〜を知る」という意味において前置詞 *alā*——つまりペルシア語の *bar*——と結び

つく。従って「いま、その地の事情を知る者たちから詳細に調査することですそれが知られ…」とでも訳せるだろうか。「寄進者」のように訳す必然性はないと考える。

テキスト読解以外にも写本の文字認識に関して、『珍貴の書』の序文の抄訳からなる最終第二〇章から言及してきた。ナスィール・アッディーンが中国暦を学んだ部分を述べる件に関しては、「漢児（キタイ）の諸賢の学問の *naṣṣ* 納失失（*naṣī* 金欄緞子）はそれ（*ll* 天文表）によって損なわれた／色褪せた（宮『モンゴル時代の「知」の東西』下巻、一〇二九頁）となっているが、写本は *naṣṣ* ではなく「名声（*namūs*）」と読める。ナスィージに注を付けずとも「名声は損なわれた」とそのまま読めば良い箇所であるかもしれない。他の部分では「しかし、彼らの文字は、*iqā*、采邑されていない（固定の場所が割り当てされていない）」し、字母に基づいていない（宮『モンゴル時代の「知」の東西』下巻、一〇三二頁）という訳が「イクター」についての注とともに登場する。原文は *wa khāl-i tishār-rā qat'ān bunyād bar hūf-i nīst* となっており、*iqā* と読まれた箇所はおそらく *qat'ān* と読むべきであり、このような難しい解釈を提示せずとも「彼らの文字は、全く字母に基づいていない」と訳すのがよいのではないだろうか。

- (20) アルダビール文書に関しては、同じくジャライル朝期のもを扱った *Imād al-Dīn Ṣayy al-Hukamā'ī*・渡部良子・松井太「ジャライル朝シャイフ・ウワイズ発行モンゴル語・ペルシア語合璧命令文書断簡二点」『内陸アジア言語の研究』三二号、二〇一七年（四九—一四九頁）が最新のものである。そこでは、著者が第一六章において扱った文書に

ついで、シャイフ・ウワイズ発行とみるゴットフリード・ヘルマンとゲルハルト・デルファアの旧説——著者言及（下巻、八九五頁、注一一）——に従うべきことをはじめとして、いくつかの解釈について議論をなしている（前掲論文、e.g., 六五頁、注一六）。

- (21) 宮『モンゴル時代の「知」の東西』下巻、一〇二九頁。
- (22) ハイアについては例えば、三村『天文学の誕生』一〇一——一二頁を参照された。
- (23) 宮『モンゴル時代の「知」の東西』下巻、六一四頁。
- (24) これについては以下の文章が刊行予定である。Yoichi Isahaya, “Fu Mengzhi: ‘The Sage of Cathay’ in Mongol Iran and Astral Sciences along the Silk Roads,” in M. Biran *et al.* (eds.), *Along the Mongol Silk Roads: Merchants, Generals, Religious Experts*, Oakland, University of California Press, forthcoming.
- (25) Nathan Sivin, *Granting the Seasons: The Chinese Astronomical Reform of 1280, with a Study of Its Many Dimensions and an Annotated Translation of Its Record*, New York, Springer, 2009, p. 123 n. 113.
- (26) そうした認識を反映した無数の研究および概説書の一例として、Morris Rossabi, *The Mongols and Global History*, New York, W.W. Norton, 2011, pp. 1–2 を挙げておく。
- (27) このことはオルセンの研究に関する文脈ではあるが、すでに宇野伸浩および松田孝一によって指摘されている（宇野伸浩・松田孝一「モンゴル帝国の成立と展開」小松久男ら編『中央ユーラシア史研究入門』山川出版社、二〇一八年、一一〇頁）。
- (28) 諫早庸一「歴史の未来 歴史学の明日——歴史の終わ

り」から問主観性の歴史叙述へ——『at プラス』三二二号、二〇一七年、一四六—一五三頁。

- (29) 例えば、宮『モンゴル時代の「知」の東西』下巻、一〇一九頁。

- (30) Persis Berlekamp, “The Limits of Artistic Exchange in Fourteenth-Century Tabriz: The Paradox of Rashid al-Din’s Book on Chinese Medicine, Part I,” *Miqat* 27 (2010), pp. 229–230.

- (31) Stefan Kamola, *Rashid al-Din and the Making of History in Mongol Iran*, Ph.D. dissertation, University of Washington, 2013, p. 244. ゆゑに この種の変更は本書でも触れられている（宮『モンゴル時代の「知」の東西』下巻、一〇四五頁、注三六）。

- (32) Michal Biran, “The Mongol Empire and the Inter-Civilizational Exchange,” in B. Kedar and M. Wiesner-Hanks (eds.), *The Cambridge History of the World*, vol. 5, *Expanding Webs of Exchange and Conflict, 500CE–1500CE*, Cambridge, Cambridge University Press, 2015, p. 545. ゆゑに この問題は天文学や医学といった学知に留まらない。例えば「上から」の政策であり著者が特に第一章において語る印章制度についてさえ、フレグ・ウルスの制度が大元ウルスのそれに影響を受けたものであることは間違いないものの、東のものがそのまま西へ受容されたわけではないことを四日市康博は論じている（四日市康博「イルハン朝文書行政における朱印と朱印文書——元朝印章制度の伝播と変容——」『史滴』三七号、二〇一五年、一二八—一〇七頁）。

- (33) Mohammad Mozaffari and Georg Zotz, “Chāzān Khān’s Astronomical Innovations at Marāgha Observatory,” *Journal of the American*

宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西』（諫早）

- Oriental Society* 132/3 (2012), p. 399.
- (34) この議論に関しては、ウィリー・ハルトナーが先鞭をうけ (Willy Hartner, "The Astronomical Instruments of Ch'ang-lu-ting, Their Identification, and Their Relations to the Instruments of the Observatory of Marāgha," *Isis* 41/2 (1950), pp. 184-194)、宮島一彦の論文（『元史』天文志記載のイスラム天文儀器について）載内清先生頌寿記念論文集出版委員会編『東洋の科学と技術——載内清先生頌寿記念論文集——』（同朋舎出版、一九八二年）四〇七—四二七頁が現在までの到達点といえる。
- (35) 山田慶児『授時暦の道——中国中世の科学と国家——』（みすず書房、一九八〇年）四八—五三頁。近年待望のジャマー・アッディーンの専論が楊巧によって刊行され、彼女はそのなかでジャマー・アッディーンがユーラシア東西を「往復」し、マラーガ天文台にもいた可能性を提示しているが、そこでの議論は要検討といえる (Qiao Yang, "From the West to the East, from the Sky to the Earth: A Biography of Jamāl al-Dīn," *Asiatische Studien - Études Asiatiques* 71/4 (2017), pp. 1234-1235)。
- (36) 宮『モンゴル時代の「知」の東西』下巻、五八五頁。
- (37) 須賀隆・諫早庸一『イル・ハン天文便覧』に見える中国暦・ヒジュラ暦換算表の再構——モンゴル帝国期東西天文学交流の再考——相馬充・谷川清隆編『第五回「歴史的記録と現代科学」集録』国立天文台、二〇一九年、二五二—二七七頁。
- (38) 宮『モンゴル時代の「知」の東西』下巻、六一五頁。
- (39) 山田『授時暦の道』九六—九九頁。
- (40) Farīd Qāsimī (ed.), *Majmū'a-yi Rasā'il-i Riyā'at wa Nuḡm-i Khwāja Nasr al-Dīn Tūsī, Tihān, Dānishgāh-i Āzād-i Islāmī*, 2010 はトゥーサーの生前に編まれた、彼の注釈本を数多く収録するアラビア語写本集成のフアクシミリ版である。トゥーサーの数学・天文書の注釈の研究としては、『アルベスト』について George Saliba, "The Role of the *Almagest* Commentaries in Medieval Arabic Astronomy: A Preliminary Survey of Tūsī's Redaction of Ptolemy's *Almagest*," *Archives internationales d'histoire des sciences* 37 (1987), pp. 3-20『原論』について Gregg de Young, "The *Tahrīr Kitāb Usūl Uqlīds* of Nasr al-Dīn Tūsī: Its Sources," *Zeitschrift für Geschichte der arabisch-islamischen Wissenschaften* 18 (2008/09), pp. 1-71 が参照せよ。
- (41) 二次文献であれば例えば——著者も別の注で挙げている通り——モハンマド・モダッレス・ラザヴィーによるトゥーサーの作品及び関連人物の総覧が有効であろう (Muhammad Mudarris-Radawī, *Alḥawl wa Ahl-i Nasr al-Dīn Tūsī, Tihān, Asāfīr*, 1991/92)。
- (42) 宮『モンゴル時代の「知」の東西』下巻、六一九頁。
- (43) Benno van Dalen, Edward Kennedy and Mustafā Sayid, "The Chinese-Uighur Calendar in Tūsī's *Zīj-i Ilkhānī*," *Zeitschrift für Geschichte der arabisch-islamischen Wissenschaften* 11 (1997), pp. 119, 129.
- (44) 宮『モンゴル時代の「知」の東西』下巻、六二三頁。
- (45) Andrew Boyle, "The Longer Introduction to the '*Zīj-i Ilkhānī*' of Nasr-ad-Dīn Tūsī," *Journal of Semitic Studies* 8 (1963), pp. 244-254.

- (46) Boyle, "The Longer Introduction to the 'Zij-i Ilkhani' of Nasir-ad-Din Tusi," p. 251.
- (47) 宮『モンゴル時代の「知」の東西』下巻、六二九頁、注三六。
- (48) 前掲書、下巻、六五一頁。
- (49) 『ムイーン史選』の史料論としては、例えば、川口琢司『ティムール帝国支配層の研究』（北海道大学出版会、二〇〇七年）、二〇一―一六三頁がある。
- (50) Thomas Allsen, "Sharing out the Empire: Apportioned Lands under the Mongols," in A. Khazanov and A. Wink (eds.), *Nomads in the Sedenary World*, London, Curzon Press, 2001, p. 178, p. 188 n. 26.
- (51) Mu'in al-Din Natanzi, *Muntakhab al-Tawarikh-i Mu'inī*, Tihān, 1957, p. 427.
- (52) とくに、松田孝一「フラグ家の東方領」『東洋史研究』三九卷一号、一九八〇年（三五―六二頁）のような重要な議論に直接関係する研究に対しては、言及があつてしかるべきではなかつただろうか。投下領と帝国との関係については、川本正知『モンゴル帝国の軍隊と戦争』（山川出版社、二〇一三年）にまとめられている。大元ウルス領内ものものについての研究は、舩田善之「モンゴル（Mongol）帝國（大元）の華北投下領研究」『中国史学』二四号、二〇一四年（一三九―一五六頁）に概観されている。大元ウルスに比して依然として未解明の部分の多いフレグ・ウルスの状況については、高木小苗の研究が注目される（Sanae Takagi, "The *Ingū* in Iran under the Ilkhanate," *Orient* 50 (2015), pp. 77–90）。
- (53) 宮『モンゴル時代の「知」の東西』下巻、六四四頁。
- (54) 大塚修「史上初の世界史家カーシャニー——『集史』編纂に関する新見解——」『西南アジア史研究』八〇号、二〇一四年、二五―四八頁。
- (55) 宮『モンゴル時代の「知」の東西』下巻、九二〇頁。
- (56) 前掲箇所。
- （北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター助教）